

AG-AF105 使用レポート

撮影 四宮秀俊

今回の『ほっといてくれ(仮)』という作品は、三宅唱監督の長編2作目にあたり、前回の処女長編作品『やくたたず』が白黒映画であったのに続き、企画のはじめから白黒作品として出発していました。『やくたたず』は、北海道の街や大地をダイナミックな動きの中で捉え、雪の白を印象的な白黒の画面に定着させた映画です。撮影は監督自らのもので、見事な画面の連なりだったのですが、今作に関して、監督は芝居に集中したいとのことで、撮影者を別にたてることになりました。

『ほっといてくれ(仮)』と題された今作、話としては、夫婦生活そして俳優としてのキャリアに危機をむかえた一人の俳優が、友人の結婚式に向かう車内で過去にタイムスリップしてしまい、自分が俳優になるきっかけを得た時期を再び経験する。そして現在に戻り俳優としての生活・日常に再び向き合っていく、というものです。複雑なストーリー構成に加え、ファンタジー的な要素、主人公の感情の微細な変化を黒から白へのモノトーンのグラデーションのなかで表現しなければなりません。監督との事前の話し合いのなかで、「この映画はファンタジーなんです」という言葉を頂いたので、それをヒントに現在と過去、東京と水戸（主人公の故郷となる場所）など様々な描き分けを考えていきました。

今回お借りすることが出来たカメラは、PanasonicのAG-AF105。ボディ側のレンズマウントがマイクロフォーサーズマウントになっており、スチールカメラのレンズが装着できるカメラです。使用したレンズは、手持ちのEOS-EFマウントのオートフォーカスのズームレンズだけだったので、絞りが開放値のみでの使用で、F値のコントロールできませんでした。なので、レンズ側で絞りをいじれるマニュアルレンズを集めたのですが、それらだけでは十分なミリ数のレンズをそろえられなかったので、マウント変換アダプターを介してもカメラ側で絞りが操作できるZuiko14-54mm（4/3マウント）のレンズを購入しワイド側を補いました。使用したマウント変換アダプターはDiscover Photo製のEOS-EF→M4/3変換マウント、Olympus製4/3→M4/3変換マウントMMF-1でした。

撮影時期は、6月後半から7月前半という梅雨まっただ中。雨の日が多く湿度が高く、気温もだんだんと高くなっていく時期でした。そのようなタフな状況の中でもAF105は素晴らしいパフォーマンスを発揮してくれました。モニターの視認性の高さもそうですし、操作性という意味ではボタンの配置や内部メニューがこれまで何度も使用してきたDVX100やHVX200などのカメラと共通しているところが多く、非常に使いやすいものでした。カード収録のカメラはこれまでも使用してきましたが、SDカードでの収録は初めてでした。タイトなスケジュールと梅雨という時期などが重なるシビアな状況をこんな小さなカードで大丈夫かなと思っていたのですが、収録の安定性、カードの扱いやすさに撮影中盤では、完全に信頼を寄せていました。

今回は私にとって初めての白黒作品ということもあり、毎晩のPCに取り込んだデータのラッシュを確認することがことのほか重要でした。カラーで撮影し、ポスプロで白黒への変換も考えたのですが、毎晩ラッシュを白黒で見るには、その方法だと一つ作業増えてしまうので、今回はAF105のB/W MODEを使用することにしました。ポスプロでの自由度は下がりますが、日々のラッシュ確認と撮影上の課題の発見にはB/W MODEでの撮影が有効であったと考えています。ワークフローとしては、ファイナルカットプロでの「切り出しと転送」時に撮影済みデータをプロレス422に変換し、その素材をもとに編集に入ることになります。AVCHDのデータを扱うのが、私にとっては今回が初めてだったのですが、特に問題なく扱うことが出来ました。

四宮秀俊（しのみやひでとし）

1978年生まれ。大学在学中に、当時東京の京橋にあった映画美学校に通いだし、映画を学ぶ。同校卒業後は、同期の卒業生たちと自主映画を作り続けている。また、撮影助手としても活動し、映画・音楽プロモーションなど商業的な映像にもたずさわっている。